多動傾向（ＬＤ）から集団不適応に陥った児童の事例

1．はじめに

この事例は，多動傾向（ＬＤ）から集団不適応に陥った小学校３年生男子Ａ男に対して，担任が教育センターとの連携を図りながら指導援助した結果，集団に適応できるようになったものです。

2．問題の概要

担任からの電話相談とその後の本人，母親，担任との面接相談から

担任

○　協力性がなく，友人関係がうまくいかない。
○　学習に集中して取り組めない。
○　会話では，自分のことばかり話して相手の言うことが聞けない。
○　細かい手作業が苦手で，作品などを完成できないことが多い。
○　他の教科と比較して，算数の計算が極端に苦手である。

本人

○　サッカーがへたで，仲間に入れてもらえない。
○　授業中，友だちからじゃまにされている。
○　先生に注意されることが多いし，友だちから仲間はずれにされるので学校が嫌い。

級友

○　勝手な行動をすることが多い。
○　授業中，先生の言うことを聞かず勉強のじゃまになる。
○　遊びに誘っても，別なことをしてまざらない。ルールを守らない。

母親

○　学校で問題が多いということで驚いている。家庭ではそんなに心配していなかった。
○　本人は，友達ができずにひとりで過ごすことが多いようなので心配。

3．診　　断

日常行動において，多動傾向，注意集中困難，手先の不器用さなどが目立ったことからＬＤ傾向があると考え，教育相談部嘱託の医師に診察をお願いした。結果は，ＬＤと診断された。ＬＤであることから多動傾向，注意集中困難がみられ，それが原因となってＡ男は級友から疎外され，孤立した感じを持っているものと考えられる。